

目的 児童を対象とした包丁に対する研究は、従来数多く報告されているが、本研究は中学生を対象とし、家庭における包丁の使用法および管理の実態や、生徒自身の体験、実践などを調査し、中学校における指導方法を解明することを目的とした。

方法 対象は中学校第1学年男女生徒116名、調査期間は昭和58年4月、調査内容は①家庭で保有する包丁の数量、使用法および管理の実態、②生徒自身の包丁の使用経験と実態である。調査方法は集合調査法を用い、回答形式は選択的質問法によった。

結果 1)生徒の家庭にある包丁の種類は8種類で、多い順にあげると、ペテナイフ、鎌型包丁、菜切り包丁、出刃包丁、牛刀である。所有数は、平均3.3本であるが、同種の包丁を2本以上持つ例は僅少である。使用方法は適切といえる。2)家庭における包丁の管理状況は、砥ぐのは父又は母で、普通砥石が用いられ、砥ぐ周期は不定である。包丁使用後の手入れについては関心がない。3)生徒が初めて包丁を使用した時期は小学校第3学年で、場所は家庭、材料は野菜を切ったものが多い。4)食品の切り方は、包丁を握って持ち、人指し指を包丁の背にかけて持ち、食品をおさえる手は、指の関節を曲げておさえて切るものが全体の約半数で、あとはそれ以外の方法である。5)家庭の包丁を使い易いと評価するものが多くその理由は切れあじと全長をあげている。6)家庭で包丁を使用することの有無、小学校における包丁使用についての指導の有無に対しては、両者とも女子に肯定的な回答が高く、男女間にあきらかな差異がみとめられ、指導上留意すべき点である。